

基調講演 I, 「GNH（国民総幸福）に喚起された開発のパラダイム」

ダショー・キンレイ・ドルジ

ブータン通信情報省次官

皆様にご挨拶申し上げます。ご列席の皆様、来賓各位。今回のシンポジウムには、賢い若者に思われるようにと望みながらこの場に参上しましたが、昨日来、国際文化会館で知識人や偉大な精神的指導者の方々と出会い、そして今朝はこの会場にお集りの皆様を見ていて、いささか自信もおぼつかなくなっています。賢いというよりはナイーブと思われるかもしれませんが、いずれにしましても、私はきわめて大胆になります。この度のシンポジウムのテーマは、開発を再考をすることです。その点につきましては率直な見解を共有いたします。もし提言が必要とされるとすれば、世界は新たなビジョン、すなわち人間開発にとってよりすばらしい目標を必要としていると、私は大胆に提言いたします。

名誉会長の庭野先生は、開発のための現在のパラダイムは、ふさわしくないということで、「新たなパラダイム」を強調されました。このことは世界中で理解が深まってきていると考えます。それでは、どのような選択肢があるのでしょうか。われわれにはどのような選択肢があるのでしょうか。この場合は、「国民総幸福」という概念と、このことを関連づけるよう努力したいと思います。この概念は、ブータン国における開発と変化のための喚起と指針となる哲学です。しかしながら、ブータン国は世界を変えるという約束はしていないという点を明確にしなければなりません。ブータン国は幸せを約束しているわけでもありません。私どもは幸福を保障することなどできません。「国民総幸福」という哲学によって、私どもが提供もうしあげたいことは、選択肢の一つであり、私どもが考えるものは、より良き選択肢です。もしお許しを頂ければ、私は、ブータン政府の代表ではないことも明確にしたいと思います。私は政府の役職にありますが、私個人の見解と、そして「国民総幸福」と呼ばれているものについての個人的理解と解釈とを共有するためにこの場にやって来ました。

そうゆうことで、まず始めさせていただけるのであれば、手短なパワーポイントのプレゼンを行ないます。それに沿って、一步一步進めて、皆様にとって私の見解が意味あるものにすべく努めてまいります。社会の発展と、そのために提案する選択肢を計画するうえでわれわれが持っていますビジョンといいますか、目標の話から始めたいと思います。この会場の皆様のほとんどが現状の開発の過程と言いますか、パラダイムをご理解されていることと思います。開発そのものはさまざまに解釈されますが、われわれが人間開発の次なる時代、いわゆる開発過程の次の段階において目にしたいものは、あらゆる生物の幸福と福祉が人間のゴール、すなわち人間のより高次の目標として採用される

ことなのです。この後のスライドで、なぜ私がそのように思うかという理由を説明してみたいと思います。幸福とか福祉については、2015年に終結するミレニアム開発目標（MDG）が、持続可能な開発目標（SDG）に取って替わるということをほとんどの方がすでにお聞き及びのことと思います。“幸福”と“福祉”というのは、この開発ビジョンに含まれるべき重要な用語であり、概念であると感じていますし、これは、世界が関わるべきことであります。それには、研究機関や個人や市民社会や各国政府や政治家など、だれもがこうした新たな構想に向けての運動に関わる必要があります。

名誉会長もわれわれを思い起されたように、ブータンにおける「国民総幸福」への喚起は、第4代ブータン国王から生まれたものです。猊下は若くして1979年のハバナ非同盟首脳会議に出席されました。ブータンへの帰路、インドに立ち寄られた時に、空港でインド人ジャーナリストらが猊下に会い、「われわれは最も近い隣人ですが、あなたのことは何も知りません」と言いました。当時は、ブータン国はほとんど知られていませんでした。それで彼らは、例えば、「あなたの国の国民総生産はどのくらいですか。分からないので」と質問をしました。そこで、国王は、「私たちは国民総生産には関心がありません。私たちにとっては、『国民総幸福』がもっと重要です」と答えました。それが、「国民総幸福」の誕生です。さらに、その国王の王子であり、現ブータン国王は、近年国民に向かって、世界中で「国民総幸福」の知名度が高まるにつれて、それはさまざまに解釈されていると語りました。「しかし、私にとっては、それは価値をもつ発展を意味します」と、語りました。そこで、こうしたことがわれわれが従うべき、つまり、われわれを喚起する指標なのです。

そのことをお話ししましたので、これから「国民総幸福」について触れますので、私が考えるその言葉の意味するものの本質についてご説明したいと思います。まず、説明すべき点は、“幸福”を理解することです。それは“幸福”という言葉は、実際に多くの懐疑心や批判を招くと思うからです。これは、ソクラテスやプラトンなどの哲学者や、東洋の賢人と呼ばれるすべての人々は、何世紀にもわたり幸福という言葉に定義しようとしているものの、その概念についての共通の理解はないと言われているからです。奥深いニュアンスがあるために、われわれには“幸福”という言葉の共通の理解はありません。「国民総幸福」では、まず、最も重要な第一歩は、“幸福”を定義することだと思えます。そこで、私は次のように定義したいと思います。われわれの語る幸福とは、一時的な意味合いではなく、わくわくすることでも、娯楽でも、楽しみでも笑いについてでもありません。ほんとうの幸福とは、深い満足感、持続する満足感です。それは、より永続的です。この幸福、この満足感、われわれ一人ひとりの心のうちにあることも理解しています。この幸福には、外から得られるものではありません。最新のマッキントッシュのコンピューターや最新の機器や最新の車や一番大きな家や最新のファッシ

ョンなどを手にすること、それらはこの恒久的な幸福の源ではありません。それらは、つかの間の感動を提供してくれるかもしれませんが、幸福の恒久的な源は、心の内を見つめ、いま持っているもので満たされることで見出されます。もっと欲しいと思うよりはむしろあまり必要としないということです。近年わが国の仏教指導者の一人が、「より幸福な人は、だれだと思うか」と実際にわれわれに問いました。それは、巨万の富を生み出す大富豪か、それとも自分はもう十分持っていると決断した貧しき人と思うか、とわれわれは問われたのです。実際は、より富める人とはだれのことでしょうか。この質問には実に示唆に富んだ英知が含まれています。なので、これこそが幸福としてわれわれが看做すものであり、その概念について、少しご説明いたします。

幸福とは、個人的な探求です。結局のところ、「国民総幸福」は国民が幸福を追い求めるための条件を造り出すのが国の責任です。ですから、こうした視点は、話を続けるうえでの前提として始めるには極めて重要だと考えます。もちろん、大きな疑問は、「ブータンの国民のすべてが、実際に幸福であるのか」ということです。いいえ。すべての発展途上国の抱える問題を私どもも抱えています。しかし、私どもには「国民総幸福」がありますか。ここで、再び思い切って、こう申し上げます。「ええ、あります」と。では、そのような文脈では、ブータンにおける「国民総幸福」とは何のことでしょうか。ここで、ブータン社会における「国民総幸福」についての私自身の純粋にして個人的な認識を説明させていただきます。また、時間の関係で手短かに、わが国の社会で知覚する（パワーポイントのスライドで描かれているような）「国民総幸福」の四層構造についてお話ししたいと思います。最初の層である、「直感的国民総幸福」は、社会的相互依存という視点から説明することが一番と考えます。ブータンは、農業人口が多く、おそらく全人口の70%を形成しています。こうした村落で真に“共同体”が意味するものは、お互いが助け合い、理解し合える少数のグループです。地元のヒーラー、地元の鍛冶屋、地元の建築家、地元の歌手、そして地元の精神的指導者などがいて、すべてがお互いを助け合っています。われわれのだれもが抱くように、「それがその他すべての社会とどのように異なるのか」と、かつて私は問われたことがあります。そこで、そのどこが特別なのでしょうか。「国民総幸福」との関連で話をするとき、人が相互依存について語る時、単に人間の相互依存を意味して言っているのではないと考えます。それはすべての生物の相互依存です。つまり、環境や樹木や花々や動物たちなど、すべての生きとし生けるものです。これがとても重要です。世界中のわれわれの多くは、われわれがすべての生き物の中で最も賢い存在なので、大自然は、われわれ人間に奉仕するためにそこに存在すると感じていると考えます。ところが、われわれが最も重要な生物ではなく、大自然がわれわれに依存する以上に、おそらくわれわれが大自然に依存しているということを受け入れなければならないと私は思います。これを受け入れることはとても重要で、相互依存という、この深遠な概念こそが極めて重要であると考えます。

第2に、われわれはいま「国民総幸福」について語っている一方で、昨日と今朝、それを実際に体験しているのです。さらに新たなパラダイムための一つのパラダイムとして、そして喚起するものとして、人が「国民総幸福」や“幸福”について語るとき、最初の疑問はもちろん、どのようにそれを測るかということです。もし人がそれを開発目標としたいと思うならば、どのようにそれを定義するのでしょうか。1970年代後半以来、ブータンは、国連組織やすべての寄付団体など、国際的な開発世界全体からこうした明確な質問を問われ続けています。そこで、それは単に哲学ではあり得ないと自分たちに言い聞かせました。もしそれが真の開発目標となるべきものであれば、われわれはそれをどのように測るのだろうか。私どもが決断したものは、その根源的考えが仏教から導かれたということです。しかしながら、これは「宗教としての仏教」ではなくて、むしろ精神的価値体系としての仏教でした。この視点から、われわれは、例えば、苦しみは苦の原因から引き離すことなどできず、それゆえに、幸福も幸福の要因から引き離すことなどできないことを学ぶことができます。ですから人は、幸福を定義するうえでは、こうした因と縁を測ることができます。これが後ほど詳しくお話する概念ですが、測るという話に戻ります。私はこれまでに幾度かこのことについて質問を受けています。そこで、これこそが私どもの見方であるというものをご説明したいと思います。つまり、幸福を測ろうとしてはいけないということです。それはさらなる懐疑心を招くだけだからです。われわれが焦点を当てる必要のあるのは、“条件”（縁）なのです。学術的構築という観点からこの喚起を理解しようと努めながら、私どもは、ある概念を思いつきました。それによって私どもは「国民総幸福」の条件を4つの「支柱」という考えによって定義しました。これら4つの柱は、(1) 環境の保護、(2) 文化の保存、(3) よき統治、そして(4) 公平で、持続可能な経済発展です。この4番目の柱が発展の伝統的な解釈に最も近いもので、それは純粹に経済発展を指します。しかしながら、私どもにとりましては、発展という概念は、はるかに広範でなければなりません。そこで私どもは、その4つの柱を9つの分野へ、さらにはその分野を実行可能なものへと発展させました。私どもの調査機関である、「ブータンと国民総幸福の研究センター」は、9つの分野から導かれるこうした実行可能なものに基づいて、調査を行ないます。

とても重要な要素である政府の責任についてこれからお話ししたいと思います。ブータンのアプローチと、私がこれまでさまざまなか所で見てきました他のものとの、一線を画するのは、この点です。すなわち、それは実際に明文化された政府目標で、幸福とは政府の目標である、ということです。ここで起こることは、4つの柱が政府の優先事項となり、立案者や政策担当者や指導者は、この点を理解することを求められます。昔は、仏教の教えに基づいて、国王は最最高の賢者でなければならないとよく言われたものです。それは、国王の決定は国民に影響を及ぼすからです。ところが、それは政府の

決断が国民に影響を与えるという点では、今日でも同様です。ご存知のように、私も政府の一員であり、われわれ政策担当者や立案者は、腰を据えて、社会に多大な影響をもつ「国民総幸福」の優先事項に向かって実際に働くのです。これは、そうした優先事項は予算や資金提供へと移行されますし、それは活動が行なわれる場です。ですから、人は冗談で「幸福は笑い事では済まない」と言うかもしれませんが、政府にとりましては、「国民総幸福」は重大な責務です。

国際化もまた「国民総幸福」の過程の重要な側面です。それは国民総幸福についていったん話を始めると、メディアがその話を聞きつけるからで、メディアにとって、それは重大ニュースだったのです。メディアは短いキャッチフレーズを好むので、「国民総幸福」は重大ニュースになりました。そこで、知識人や学者がそれを耳にし、本当に大きな意味を持つものがそこにあることに気づくようになりました。一時、世界が国内総生産に懐疑的になり、何か欠落していると感じていた時に、そうした方々は「国民総幸福」が本当の選択肢になるかもしれないと考えたのです。そのとき各国政府や政治家はそれに気づき始めました。現在では、もちろんいくつかの場合では極端な立場を取っているものもあり、中には十分な説明もせずに、あちらこちらで幸福という考えをただいい加減に扱ったり、時には不適切な対象に当てはめている人もいます。いずれにしても浸透し始めています。しかし、ここで私が強調したい点は、ブータンは出かけて行って、幸福について教えることも説くもしないということです。それは私どもが試してみたいとも思わないことです。むしろ、選択肢を提供するという意味になります。その概念を討議しつつ、この数年間で私が見出したことは、このシンポジウムでのケースのように、われわれは常に学習の状態にいるということです。実際には、福祉や持続可能性や気候変動などの概念について、かなりの研究が世界中で行なわれています。これは、ブータンの能力を越えています。私どもにはそれらすべてを行なうだけの学問的奥行きはありません。それを行なえる人材もいません。しかしながら、私どものできることは、「国民総幸福」というアイディアに奥行きを添えてくれる、そうしたものから学ぶことです。考えや概念を共有する機会を持つことは、素晴らしいことです。

新たなパラダイムの必要性と言え、今日のような国内総生産の成長は、不適切な物差し、つまり人間開発の過程には不適切な目標であるという考えの受け入れがますます増加するのを即座に気づくことは、興味深いことです。これは、その考えが本質的には限りある惑星での、限りない成長を根拠にしているからです。研究によって、今日われわれが消費しているペースでは、今日の人口を支えるためにはすでに4つの惑星が必要なことは明白だと私は思います。科学的に証明されているのです。国内総生産はすでに単なるライフスタイルよりも、はるかに成長し、今日の経済の基盤となっています。それは実行可能なことではありません。それは持続可能ではありませんし、それは結果的に

すべて生態的、社会的、文化的、政治的危機になっています。私がこの場で申し添えたい点は、私が福祉や持続可能性や生態系や地球温暖化や気候変動に関して、世界中の大学や研究機関で行なわれた驚くべき研究について先ほど述べたことです。しかしながら、何か欠落しているものは、人間の文化の多様性や豊かさについて十分な研究が為されていない点です。それは、これまで無視されてきたように思われます。ブータンでは文化の保存の大切さを大いに強調しています。「国民総幸福」という用語は、国民総生産の語呂合わせです。そして、もし申し上げるとすれば、その方策は、国内総生産の概念に挑んでいるところであるということです。私どもは、国内総生産が“悪い”とか“不必要”とは申しません。国内総生産は、不適切であると申しているのです。もっと広範囲に考える必要があります。現在の概念に挑み、その先を見据える必要があります。世界的な対話の必要性があります。昨年4月に国連で会合を持ったとき、宗教指導者や精神的指導者、政治家や政府関係者や学者や社会奉仕活動団や非政府組織や声高に意見を主張し、活動するリーダーを含めた800名が参加しました。それは私どもが必要と感じるような広範な運動です。新たな目標は、簡単に申し上げますと、社会の幸福であるべきです。

先に、個人的探求としての幸福についてお話ししましたが、ここでの前提は、皆さんの周囲のだれもが幸福でなければ、個人として幸福にはなれないということです。ですから、共同体や社会に敏感でいる必要があるので、目標は社会の幸福です。こうした広範なレンズを通して世界やわれわれが行なっていることすべてを見つめ、国内総生産の先に行く必要があります。幸福な社会を創造するための条件は、最も広い意味での“福祉”です。では、対話によってわれわれが見出したことは、“福祉”と“幸福”との間に混同があることです。これは私が理解していることであり、私よりも上手にそのことを説明できる方がこの会場には大勢いらっしゃると思いますが、同じ文書の中ですら、その二つの用語が言い換えとして使われているようです。私にとっては、“福祉”とは、個人が幸福を得るために不可欠な条件のことです。この福祉は健全な肉体的、精神的、感情的、霊的な福祉です。それは、すべての生物、生きとし生けるものと調和することの重要さと結びついています。これは単なる熱望ではなく、人間開発の目的となるべきものです。ですから、この理論を要約した表をいまお見せしています。そして、もし私がスクリーン上で示すならば、社会の幸福はこのアプローチにおける究極の目標です。幸福のために不可欠な条件とは、感情的、肉体的、霊的、そして心理的福祉です。これこそがわれわれの目指しているものです。ここにこそ「国民総幸福」の4つの柱とのつながりがあります。すなわち、環境保護、文化の保存、持続可能で、公平な社会経済の発展、そして良き統治がこの条件の基盤です。これらの概念はそんな短時間で簡単には説明致しかねるものだと承知しておりますが、そのいくつかは、後ほど行なわれますパネル・ディスカッションで出てくるのではないかと理解しています。しかし、4つの柱が

9つの分野へと拡大するこの条件は、幸福へと導くものであり、その9つの分野は同時に基準であり、評価なのです。どのように測るのか、と尋ねられたとき、これらが実行可能なものを導き出す領域となります。この表では、いわゆる4つの財、つまり自然、社会、人間、そして経済面の財が、4つの柱と9つの分野を効果的に機能させるためには、効果的な政策を持つことが重要であると見ます。

とても興味深いこと、その他のあらゆる理論と異なる点は、幸福の能力の重要さです。これは、われわれの英知の伝統のなかにすでに大きく占めているものです。その理論とは、すべての条件、4つの柱、9つの分野、そして人間の幸福に必要なすべての条件を皆さんはお持ちかもしれないということですが、それは、自動的に幸福を得るという意味ではありません。それは、単に何もしなくとも得られるものではありません。実際には皆さんは幸福を得るための能力を必要とします。そして、あらゆる伝統が持つ魅力あふれる、さまざまな文化の中にこうした能力を提供できる伝統的な英知があるのが分かります。一例は、瞑想です。これはとても興味深いです。このことを昨年ニューヨークで討論したときに、ウィスコンシン大学で行なわれている「心と生命」の実験に出会いました。リチャード・デビッドソン教授がその実験を指揮していて、そこにはドラマ下も招聘して、MRI（磁気共鳴画像法）による写像を行なっています。著名な僧侶であるマチウ・リカールもおられ、実際に2時間以上もMRIの機械の中に入って瞑想し、脳の動きを撮影していました。そして、現在彼らはプレゼンを行ない、実際に瞑想が、幸福感を増幅させることを証明しています。つまり、福祉や幸福を司る脳のその部分は、はるかに大きくなります。それは、瞑想がいかに人の福祉や幸福に影響を与えるかについてのとても魅力的な実験でした。これらは、幸福とは教えることができるものだということを示すような能力です。幸福とは、実践によって学ぶことができます。そして、これはつかの間のスリルでは味わえない深い満足感です。

社会の幸福について語る時、それが真に意味することは、選ばれたほんの少数の人々だけというよりはむしろ、社会全般、国民全体で必要とするものを見つめている必要があるということです。人間の主な弱点の一つは、多くの宗教の教えが指摘しているように、食欲であり、これがあらゆる種類の問題の原因となります。社会のすべての国民の基本的要求に応える必要があります。

これまでのところ、幸福を測ることが可能となる視点から、4つの柱と9つの分野と個人の幸福の手段や良き政策の必要性との重要なつながりを見つめてまいりました。しかしながら、われわれの直面する不気味で、威圧するような多くの課題を見つめることなくして、「国民総幸福」や新たなパラダイムについての議論を終らせることはできません。「国民総幸福」が喚起した新たなパラダイムについての国連の会議に出席したとき

に、親友であり、スタンフォード大学の経験豊かで、とても信頼できる史学の教授が私に、あまり期待しすぎてはいけないと忠告してくれました。「行き過ぎて、世界を変えようとしてはいけない。それはできることではない。巨大な抵抗が待っている。資本主義体系全体があなたを打ちのめそうとする」と言っていました。特に今日では、幸福という概念は普及し、浸透していますが、懐疑論者や批評家が、会議に参加し、討論に加わり、こう言うのです。「ちょっと話を聞いてから、いつものようにビジネスに戻ろう」と。だれもが幸福ということに反論したがるらないのです。それがこのアプローチの美点の一つです。ブータンが2年前に国連で「国際幸福デー」を提唱したときに、それは満場一致で迎えられました。政府の指導者で、「いや、いや、幸福などは欲しくない」とか「わが国の国民に幸福など要りません」とあえて言った人はおりません。しかし、それでも懐疑論者はいるもので、多くの場合、資本主義体系を基盤とした機関は、その提唱を実際には現存のパラダイムに対するちょっとした挑戦、ほんのちょっとした脅威と看做していました。多くの政府は、生産し続ける、消費し続ける必要性を感じています。彼らは、消費の需要に応えるために生産し続ける必要性を感じています。それが国内総生産を引き上げる助けになるからです。それで、「国民総幸福」思考は、ある意味、ちょっとした脅威と写るのです。その思考はちょっとした左翼的なものとか、社会主義的なものとして容易に看做すことができると、述べたのはコロンビア大学の経済学者であるジョセフ・スティグリッツでした。人は、その思考に反論するために多くの用語を見出します。こうして、私どもは、その思考というのは、より実践的であるべきなので、新たなパラダイムそのものを定義するうえでも、大いなる挑戦であると深く認識しております。私どもは、200カ国ほど、というか国連に開発のひな形を提供することを望んではおりません。しかし、選択肢がそこにあるとすれば、それぞれにとって適切なものを選びすぎるのは、政府や異なる社会や、異なる文化のアプローチ次第です。その過程もとても重要です。もちろん、正規の過程も進行していて、その場では、日本がとても積極的な参加者だと承知しています。ところが、2015年にミレニアム開発目標が終了するとき、新たな時代の黎明となります。国連そのものも新たなパラダイムを思考しています。こうしたアイデアや計画のすべてが、人間開発のための新たなビジョンに加わることを願っています。そういう訳で、可能性を切り開くための目標としてそこに幸福というような概念を持つことがとても重要なのです。そして、もちろん、あらゆる課題の後の、次の段階はそのすべてを社会のあらゆる階層が関連する実際の政策や活動や方策へと移行するために働くことです。ご列席の皆様、来賓各位、今朝、皆様と共有したいと思っていました考えをかいつまんでお話ししました。今日と明日行なわれま